

ニューシティ管弦楽団 第1回定期演奏会

常任指揮者:内藤 彰

インスペクター:一村 誠也

コンサートマスター:池田めぐみ

<ヴァイオリン>	<ビオラ>	<フルート>
青木 奈緒子	大村 真理	一村 誠也
飯田 芳江	久郷 寿実子	井ノ上 洋
池田 めぐみ	桜井 多美子	古川 仁美
泉 かつら	野口 温子	
上原 まさみ	原田 定矩	<オーボエ>
小澤 薫	松田 美奈子	猿田 博
小野 久美子	松原 第介	松岡 裕雅
海和 伸子	依田 佳代子	
菊池 まり子		<クラリネット>
郷道 裕子	<チェロ>	小林 桂子
小倉 麻理子	五十嵐 大	谷尻 忍
酒井 菜美	斉藤 吉子	
佐藤 美佐子	千石 ゆき子	<ファゴット>
鈴木 純子	野口 桂子	飯塚 美穂
高階 久美子	畑 佐枝子	多田 逸左久
塚脇 通成	千石 ゆき子	
水野 真一	牧野 慎也	<ホルン>
西宮 小織	近藤 浩志	上原 宏
丹羽 道子	松下 修也	上村 雅英
廣島 みか		斉藤 善彦
深沢 聡子	<コントラバス>	丸山 勉
古市 久留美	井上 裕介	
堀江 紀	江上 靖	<トランペット>
宮林 陽子	片柳 葉子	前田 寛人
	金岡 秀典	三田地 裕
	本間 園子	元井 勤
	渡部 栄郎	
		<トロンボーン>
	<パーカッション>	長嶋 睦
	植松 文雄	古川 諭
	鷹羽 香緒里	山崎 利幸
	高山 泰利	郡 匡一郎
	藤原 靖久	
		<テューバ>
		土屋 史人

NEW CITY ORCHESTRA

ニューシティシンフォニー 第一回定期演奏会

NEW CITY ORCHESTRA

ニューシティ管弦楽団 NEW CITY ORCHESTRA

ニューシティ管弦楽団は、1986年に設立された。設立当初から、音楽監督・指揮者に内藤彰氏を擁している。名曲コンサート、協奏曲・アリアの夕べ、移動音楽鑑賞教室など、1つ1つ堅実な努力を重ねながら、着々と実力を付け今日に至る。特に、1989年9月のユニバーサル・バレエ日本公演における演奏や、11月のレナータ・スコットとアルフレード・クラウスのデュオ・リサイタルでの伴奏で、高い評価を受けた。在来のオーケストラが円熟した響きを楽しませてくれるとすれば、ニューシティ管弦楽団はイキの良さ、はつらつとした若さを身上とし、無限の可能性、将来性を持っているといえよう。常にフレッシュで意欲的な演奏で、従来のクラシック音楽愛好家のみならず、より幅広い聴衆に音楽の魅力を伝えるような、幅広い活動を囑望されている。なお、今秋には、二十余回にわたるユニバーサル・バレエ日本公演の伴奏も予定されている。



内藤 彰 (指揮) AKIRA NAITOH

名古屋大学理学部卒業。在学中から山田一雄に師事し、同大学交響楽団、同合唱団の学生指揮者を務める。卒業後、桐朋学園大学研究科(指揮専攻)に学び、同大学で小沢征爾、秋山和慶、尾高忠明他に師事する。

研究科修了後、山形市より委嘱され山形交響楽団の専属指揮者を3年間勤め、地域文化の向上に寄与する。'86年にプロ混声合唱団「東京合唱協会」を、'86年には「ニューシティ管弦楽団」を設立、中堅指揮者として幅広い活躍をしている。

現在までに、山形交響楽団のほか、東京交響楽団、新日本フィル、東京フィル、東京シティフィル、新星日本交響楽団、ニューフィル千葉、神奈川フィル、群馬交響楽団、名古屋フィル、名古屋シティ管弦楽団、九州交響楽団を指揮した。

ニューシティ管弦楽団、東京合唱協会の音楽監督、常任指揮者。

オISTRAフの最後の愛弟子

カヤ・ダンチョフスカ KAJA DANCZOWSKA

ポーランドのクラコフに生まれ、7歳よりピアノとヴァイオリンを始める。8歳よりユージェニア・ウミンスカに学び、9歳にしてロクラフで開かれた国内コンクールで優勝、奨学金を得てヘンリック・シェリング・パウエル・フレッキに師事する。

1970年には、モスクワに渡りダヴィド・オISTRAフの2年間のマスタークラスに参加、以後彼の逝去するまで彼の持つ技巧、信念を継承すべく最後の愛弟子となる。さらに1975年には、カナダでルジェーロ・リッチにも師事している。

世界の名だたる国際コンクールに次々と上位入賞を果たし、ポーランドを代表するヴァイオリニストとしての名を不動のものにした。現在はクラコフ音楽アカデミーの教授として、後進の指導にも力を注いでいる。彼女の賞歴は次の通りである。

1967年 ヴィエニャフスキー国際ヴァイオリンコンクール第3位

1969年 カルチ国際ヴァイオリンコンクール第2位

ブルガリア国際青年ヴァイオリニストフェスティバル第1位

1970年 シュネーヴ国際音楽コンクール第2位

シュネーヴ国連25周年記念コンサート金賞

1975年 ミュンヘン国際音楽コンクール第1位

1976年 エリザベート王妃国際音楽コンクール第2位

世界各国で意欲的な演奏活動を続けている彼女は、カラヤン指揮のベルリンフィルとの共演をはじめ世界の著名オーケストラとの共演も多い。協奏曲のレパートリーとしてはヴィヴァルディ、バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、ヴィエニャフスキー、カルロ・ヴィチ、シマノフスキー、ショスタコーヴィチ、ペンデレツキなど幅広い。

日本では1985年と87年にリサイタルを行なっているが、いずれも高い評価を得ている。今回は日本のオーケストラとの初共演であり、祖国ポーランドの作曲家ヴィエニャフスキーをどう披露してくれるのか大変期待される。

プログラム

グリムカ
M.I.Glinka

歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲 「Rouslan and Ludmila」Overture

ヴィエニャフスキー
H.Wieniawski

ヴァイオリン協奏曲 第2番ニ短調 Violin concerto No.2 in d minor op.22

—— 休 息 ——
Intermission

チャイコフスキー
P.I.Tchaikovsky

交響曲 第4番 へ短調 Symphony No.4 in f minor op.36

<曲目解説>

グリムカ: 歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲

ロシア音楽の祖と呼ばれるグリムカの作品の中で、現代でも一番よく演奏されるのは、恐らくこの序曲だろう。人々の心を引き付けてきたこの曲は、ロシアの管弦楽作品の発展の歴史から見ても、重要な位置を占める。

従来のロシアオペラは、イタリア様式の影響下にあったが、このオペラは、むしろドイツ音楽の様式の中に、ロシア民族の音楽性を強く表現している。全編に流れる急速なテンポは、ロシアの男性の激しい踊りを思わせる。そのため、ベテルブルグ大劇場での初演の時には、当時の貴族たちに「上流社会には無縁な、百姓や馭者の音楽」と評され、ロシア皇帝ニコライ1世は、演奏の途中で席を立つたと言われる。

急速なパッセージを要求されるこの曲、楽員にとっては、しんどい曲の1つである。

ヴィエニャフスキー: ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ短調

ポーランドの作曲家として最も有名なのは、ショパンであろう。その次に有名な作曲家といえば、恐らく、このヴィエニャフスキーである。彼は、8歳の時にパリ音楽院に入学し、11歳の時にはヴァイオリン演奏部門の第1位を獲得した。その後、世界各地で天才ヴァイオリニストとして活躍するかたわら、多くのヴァイオリン曲を作曲した。

ヴァイオリン協奏曲第2番ニ短調は、オーケストラ付きのヴァイオリン作品として、魅力に溢れた名品である。作曲家と同じポーランド出身のダンチョフスカが、どんな演奏を聴かせてくれるか大いに期待したい。

第1楽章: アレグロ・モデラート ニ短調 4/4

拍子

第2楽章: ロマンティック・アンダンテ・ノン・トロポ 12/8拍子

第3楽章: アレグロ・モデラートニ短調 2/4拍子

チャイコフスキー: 交響曲第4番ニ短調

チャイコフスキーは交響曲を6曲作っているが、その内、後半の3曲、すなわち、第4番、第5番、第6番(悲愴)は、彼の交響曲作曲家としての真価を発揮した傑作として知られている。

第4交響曲は、その第1楽章の勇壮な金管楽器の響き、チャイコフスキー独自の暗く美しい木管楽器のメロディーによる第2楽章、そしてこの交響曲の大きな特長でもある第3楽章の弦楽器による印象的なピッツィカート、そして圧倒的な歓喜を盛り上げる第4楽章、こうした変化に富んだ内容を、見事に4つの楽章の中にまとめている。

第1楽章: 序奏とモデラート・コン・アニメ へ短調 9/8

第2楽章: アンダンテ・ハイン・モード・デ・カンツォーネ 2/4

第3楽章: スケルツォ・ピッツィカート・オスティナート・アレグロ 2/4

第4楽章: 終曲アレグロ・コン・フォーコ へ長調 4/4